

第1章 ブラジル社会の形成

ブラジルの宗教風土に立ち、日本の新宗教運動を俯瞰したとき、それらの活動の規模は決して大きくはない。初期の移民とともにブラジルに渡った老舗の教団に天理教があるが、同国の総人口1億9千万人(2010年現在)にたいしてその信者数は3万人程度だとみられている。比較的知名度が高い世界救世教の場合でも、地理統計院IBGEの調査データによると10万人強で、周辺的な信者を含めれば30万人から50万人ぐらいになるだろう。この数値がブラジル全人口の僅か0.2%程度であることを考えたとき、総人口比で64.6%のカトリックとは全く比較にならないことがわかる。しかし、筆者は日本の新宗教の存在意義を否定するわけではない。宗教運動の量的な議論に意味はあるが、一方で個人が体験する宗教的生の意味が質的に問われるべきだからだ。しかし、日本の新宗教がブラジルに渡るまでに流れていた年月は、その受容をむずかしくするのに十分だった。そこで、しばらくブラジル社会の形成について概観し、その宗教風土にアプローチしていきたい。

第1節 植民地期(「発見」から奴隷制終結まで)

15世紀末から16世紀にかけて大航海時代を謳歌したスペイン人たちは、新大陸「発見」でアステカ、マヤ、インカといった、いわゆる高文化を誇る先住民と遭遇し、ヨーロッパ人の経済的欲望を満たす究極的な商品である金を収奪していった。一方、ポルトガル人がそこで見出したものは、赤色染料の原料となった「ブラジルの木(pau brasil)」である蘇芳^{スオウ}だった。さらに、彼らが出会った先住民のトゥピー族は狩猟採集経済にあり、社会構造も他の高文化圏と異なり複雑でなかった。蘇芳の伐採には先住民の労働力が利用されたが、後に労働力で優れた黒人奴隷が商品として「輸入」され、使われるようになった。

ブラジルの初代総督マルチン・アフォンソ(Martin Afonso)は、1533年に現在のサンパウロ市から約70キロのところにある海岸線の町サンビセンテ(São Vicente)でサトウキビ栽培を開始し、奴隷を送り込んだ。そもそも奴隷貿易はローマ法王が承認したもので、教権によるお墨付きが与えられており、貿易商はスペイン・ポルトガル両国王に人頭税を支払うようになっていた。アメリカスにおける最後の奴隷制がブラジルで廃止される1888年まで、1000万人から5000万人の黒人奴隷がアフリカからアメリカスに運ばれたと言われる。

(表1) ブラジルの人種構成 単位 (%)

人種\年	1872	1890	1940	1950	1990
白人	38	44	63	62	55
黒人	20	15	15	11	5
バルド	42	41	21	26	39

出典: Ribeiro 1997: 229 から筆者作成

ブラジルに輸入された黒人奴隷の数は、ブラジルの著名な人類学者ダルシー・ヒベイロ(Darcy Ribeiro)によれば600万人程度だというのが(Ribeiro 1997: 228)、奴隷解放令発布(1888年)直後に当時の財相ファイ・バルボザ(Rui Barbosa)が奴隷制をブラジル史上の「黒い汚点」として公文書を焼き捨てたため詳細はわからない。先述のとおり、奴隷貿易はカトリック教会による宗教的な後ろ盾があった。その意味でもブラジル社会の形成にカトリック教会が果たした役割は大きかった。

奴隷貿易が廃止されたのは1850年だったが、それまでにブラジルに入植したヨーロッパ人は50万人にすぎず、先住民人口は500万人だったという(Ribeiro 1997: 228)。奴隷貿易が終わって約20年を経た1872年の段階で白人人口は全体の38%である(表1)。黒人と白人の混血であるバルド(ムラトとも呼ばれる)の割合は42%で、そこには黒人と先住民の間に生まれたカフーズ、そして先住民や黄色人が含まれている。この頃、白人以外の約62%の人びとがヨーロッパ文化というよりもアフリカや先住民の文化を生きる人びとであり、特にアフリカ文化の影響力は強かった。奴隷制が終わった1890年でもそれらの数値が半数を超えていることに注目しておきたい。

ここで当時の宗教風土を想像してみよう。奴隷制が終わるまでのブラジルは、ヨーロッパ的、つまりキリスト教(カトリック)的というよりも、現在も民衆の間で幅広く受け入れられているアフリカの要素に、ある程度の先住民的要素が加味された状況にあったと考えるのが正鵠を射ているのである。

植民地時代を通じて、ヨーロッパから渡った人びとは男性の割合が女性を上回っていた。そのため白人男性はアフリカや先住民の女性との間に子供をもうけた。このことはブラジルでアフリカや先住民の文化が継承されることを容易にした。プランテーションでは農場主の子どもたちがマイン・プレッタ(黒人の乳母)に育てられ、大邸宅では黒人奴隷が調理を行った。ブラジルの国民食フェイジョアードは奴隷が考案したものとも言われ、豚の内臓、耳、鼻など、農場主が口にしなかった残りの部位を、黒豆をベースに煮込み、ご飯と混ぜて食される。このように、アフリカの影響はブラジルの特に食文化に看取されるが、実は民衆の宗教実践においても同様の影響が見て取れる。この点についてはいずれ解説する。

ブラジル「発見」以来、1950年までにヨーロッパから移住してきた人びとは500万人程度だとされる。1890年から1940年の間に白人人口は全人口の半数を超えた(表1)。しかし、その理由はヨーロッパからの人口流入にではなく、生活水準が高かった白人の自然増加にあったとみられている(Ribeiro 1997: 230)。また、19世紀末からのヨーロッパ移住者の多くはブラジル南部に飛び地的な集住地を形成した。同様に日本人もコーヒープランテーションの開かれたサンパウロ州やパラナ州にたくさんの植民地を造った。そこは、ブラジルの中のニホンだった。日系人は長らくの間、そこで日本語や日本文化、そして自らの宗教を継承していった。ダルシー・ヒベイロは、20世紀に移住してきた人びとが、すでに形成されていたブラジルの文化構成を大幅に変化させることはなかったという(Ribeiro 1997: 242)。ブラジル社会はこのように、いわば多民族のパッチワークとして生み出されてきたのである。

以上の考察から次のことが結論づけられる。人口構成の変遷を見る限り、ブラジルでは奴隷制が終わるまでアフリカ文化の影響が強かった。その文化は宗教風土にも多大な影響を与え、心霊主義をブラジルに定着させる基盤を築いた(後述)。現代のブラジルの宗教風土には心霊主義の影響力が強い。その理由はこうした社会と文化の形成のあり方に起因しているのである。

【参考文献】Ribeiro, Darcy. *O povo brasileiro: a formação e o sentido do Brasil*, Companhia das Letras, 1997.